

国語

E/P/G方式(2023)

- (注意事項)
- 1 問題文は29ページあります。
 - 2 解答は解答用紙の所定欄に記入してください。下書きは、問題冊子の余白を利用してください。ただし、回収はしませんので採点の対象とはなりません。
 - 3 解答はすべてマークセンス方式となっていますので、解答用紙の注意事項をよく読み解答してください。
 - 4 受験番号・氏名・フリガナは、監督者の指示に従って、解答用紙の所定欄に丁寧に記入してください。
 - 5 解答用紙にマークセンス方式の受験番号欄があります。受験番号をマークする際は濃く丁寧にぬってください。
 - 6 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページ落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気づいた場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。

第一問 次の文章は、一九八一年に発表されたものである。これを読んで、後の問いに答えなさい。

言葉は文化の基本構造である。

私たちの話し言葉、書き言葉の二重の構造は、日本文化の根深い基本構造を形作っている、と私は考える。そこで、私たちの言葉の二重構造を、⁽¹⁾文化の二重構造との関連から考えてみたいと思う。

一般に日本人は、自分たち日本の生活習慣や固有の文化などを、非常に特殊なものだと考えているようである。このことは外国人と直接つき合うような場合にもっともはっきり現われてくることだが、たとえば、取引先の人と出合うときの挨拶の仕方、用件の持出し方、さては夜のセツタイのやり方など、こういうわれわれ独自のやり方は、とうてい外国人には分るわけがないと思う。またたとえば、浪花節ななわぶしや俳句などの伝統芸能についても、通り一遍のことならともかく、その微妙な味わいについては、外国人は全く立入ることのできぬ領域である、と思う。

もちろん、こういう考え方は、外国人とつき合ったときよく分ることなのだが、ここで大事なことは、外国人とのつき合いのない人々でも、このような日本固有の慣習や文化の特殊性について、一般にかなりはつきりとした考えを持っている、と思われることである。「日本人でなきゃ分らないね」というようなよく聞かれる文句は、当然その裏に、「外国人には分らないね」という意味を含めている。そして、このような文句は、多くの日本人が、確信をもって断言するのである。

もともと、近頃は日本の国際的地位の向上とともに、外国人が日本の会社に見学にきて、その特殊な人間関係の機構を学ぼうとしたり、また、禅や日本料理などが外国でもはやされたりする。日本文化の特殊性を確信をもって断言する多数の日本人は、このことにいささか驚く。一方、嬉しくもあり得意でもある。が、結局のところ、「分るはずがない」という根本の確信は、おそらくゆるがないであろう。「分るはずがない」ということは、事実として分るかどうかとはい、一応別のことなのである。

ところで、他方、私たちの国は、世界中の各国から、その文化のセイブイ(3)ともいうべきものを、熱心に取り入れ、理解し、自分たちのものにしようとしてきた。工業、発明、制度から芸術、料理に至るまで、一般に優れている、先進的である、と評価されるものは、たいてい日本に取り入れられている。そして、こうして取り入れられた異国の文化を、私たちは「分る」、少なくとも、「分らない」とはまず思わないであろう。

以上、ごく簡単に概観した私たち日本人の文化観は、一見別々の現象のようであるが、これは一つの視点からとらえるべきであろう、と私は考える。つまり、一方で、外国人に「分るはずがない」固有の文化、他方で「分るはず」の異国渡来の文化、この二つの文化理解の態度は、基本的に一

つのもので考え方からきている、と思うのである。

いったい、この島国に住んで、直接外国人とのつき合いを知らぬ多数の日本人が、私たちじしんの文化の独自性について、確信とも思えるほどの基本的考え方を持っているのはなぜか。それは、他方で、私たちはすぐ傍らに、すでに取り入れた異国の文化を持っているからである。両者ははつきりと対立している。そしてたがいに対立させられている、ということが、実は私たちのものの理解の仕方なのである。

「分るはず」の文化は、すでに私たちの生活の中にある。それは元来異国渡来の素姓であるが、私たちの中に取り入れられ、もっと大きな一つの構造の中で位置づけられている。もっと正確に言えば、初めに一つの文化構造があつて、そこにおける「分るはず」の文化が、元来異国渡来の素姓なのである。「分る」のは、まず私たち日本人にとってであり、そしてまた、その素姓の上から言つて、外国人にとってなのだ。したがつて、このことからまた、この一つの文化構造における「分る」部分の要素は、本質的に普遍的な性格を持つているはず、とされる。

そこで、私たち日本人が、外国人に対して意思を伝達したい、と思うときは、この「分るはず」の要素を使用する。日本人と外国人とのつき合いは、「分るはず」の文化要素によつて行なわれる。逆に言えば、日本人と外国人とのつき合いは、「分らないはず」の文化要素の方には立入つてこない、ということである。日本人が、外国人を、容易にここへは立入らせないのである。

たとえば、日本にかなり長く住みついて、しかも日本に好意を持っていて、何とか日本を知ろうとする外国人が、よく、日本人はなかなか社交的で、私たちのちよつとした日本知識もほめてくれたりするが、さてそれ以上のつき合いにはどうも立入らせてくれない、などと嘆く。私たちの対外態度の二重性を、外側からとらえた批評である。

以上のように、日本の文化は、基本的に二重の構造を持つていて、と私は考える。この二重の要素は、タテマエとホンネと言うのとも共通するところがある。オモテとウラ、ハレとケ、などとも似ている。が、とくに、私がここで、「分るはず」と「分らないはず」の一对の二重要素で説いたのは、本論である言葉論との関連から考えたためであつた。

翻訳と日本語というようなテーマで考えるとき、まず、日本語の基本的な二重構造というものを、私は根底に置かざるをえない。この二重構造は、まさしく前述の日本文化の二重性に対応している。と言うよりも、私の考えの視点によれば、言葉の構造こそ下部構造であつて、思考様式、文化のパターンの方はむしろその上部構造である、と考える。

日本文化の二重構造ということは、文化論ばかりでなく、政治思想史や経済学などの分野でも、近年指摘されることがある。が、日本語の二重構造というような意見は、まず聞くことがない。私は敢えてそれを言い出そうとする。それは、他方に、私の問題意識として、日本文化が課題となつ

ているからである。

そこで、ここから言葉の問題に入っていこう。

日本語における二重構造ということは、まともには言われはしないとしても、よく見てみると、あちらこちらに、それと共通する発想や表現形態が見つかる。たとえば、古く和漢混交文と言うときの「和」と「漢」がそうである。同じ系譜で、漢字かな交り文と言うときの「漢字」と「かな」もそうだ。同じくまた、私たちの漢字の二重のよみ、つまり「音」と「訓」とがそうだ。

そしてこのような表現形態についての意識的な反省、指摘としては、本居宣長の『詞の玉緒』^{ことばたまのお}における、「玉」と「玉緒」とがそうだ。宣長のこの考え方は、いわゆる鈴屋門下^{すずのや}に継承されるのだが、やはり、近代におけるその継承者である代表的国語学者、時枝誠記^{ときえだまこと}を挙げなくてはならない。

時枝の国語文法論では、詞と辞との二大別を基本に置いている。詞とは、品詞で言えば名詞、動詞、形容詞、などであり、辞とは助詞、助動詞が中心である。そして、詞とは「概念過程を経て成立したもの」であり、「主体に対する客体を表現」し、他方、辞は、概念過程を経ない「主体それ自身の直接的表現」である、と言う（『国語学原論』）。そして、日本語は、辞が、詞、または詞と辞を含む一連の言葉をまとめ、統一していくような構造である、と説いている。

以上ごく大ざっぱに概観したところをまとめると、日本語は、基本的に二つの要素から成っており、その一つは、漢字、または漢字で表現するのに適した言葉、時枝の言う詞、もう一つは、かな、またはかなで表現するのに適した言葉、時枝の辞、から成り立っている、と言えよう。

漢字とはもちろん元来異国の文字である。そこで、日本語は、異国の素姓の言葉を、自らのタイナイ⁽⁶⁾に包みこんでできあがっている。このことは、もう一つの面から見ると、異国の素姓の言葉を自らの内部に入りこませながら、他方のキツスイ⁽⁷⁾の自国の言葉とまぎれさせることなく、構造的に併存させている、ということなのである。

日本語における翻訳の機能は、まず基本的に、この漢字中心の詞の言葉が担当している、と言うことができる。近代以後、それ以前の中国語受容文化から、西欧語受容文化へと変わったときも、媒体として利用されたのはやはり主として漢字であった。翻訳の要請にこたえて、漢字の新語が続々と作られた。概念、主体、客体、等である。また、従来使われていた漢字も、翻訳語としての新しい意味を担うようになった。たとえば今日、文化という言葉を見れば、多数の日本人は、cultureという横文字を思い浮べるであろうし、表現とはexpressionのことだ、と思うであろう。

私たちがcultureという言葉聞いて、すぐその意味が「分るはず」と思うのは、この言葉が文化という漢字に対応しているためなのである。たとえ、今、たまたまよくは分らなかつたとしても、文化という文字で表わされている以上、分らぬはずがない、と思う。だから、このような機能の

漢字とは私たち日本人にとって普遍的な意味の言葉だ、とすることができよう。

漢字製翻訳語が日本人にとって普遍的な言葉である、ということは、日本語から外国語へという翻訳の場合にもよく示される。たとえば、「あらわす」とか、「あらわれる」というやまと言葉を横文字にしようと思ふとき、これを「表現する」と言い換えてみる。そしてその上で、expressだ、と思う。こみ入った文章の翻訳の場合ほど、このような漢字表現を媒介とした横文字への転化は、はっきりしてくるだろう。

日本語における二重構造とは、本質的に、土着の言葉と、外来の素姓の言葉との二重構造なのである。したがってその二重性は、漢字、かなというような個々の単語のレベルばかりでなく、文法や文体などにもとらえることができる。

外来の素姓の言葉の基本的な文体は、漢文訓読の文体である。これは蘭学を経て、明治の英学へと受け継がれ、翻訳における直訳の文体を作った。この直訳文体は、翻訳の場に限られず、普通の文章表現にも及んでいき、文章家たちの工夫によってしだいに洗練され、遂に近代日本の文章語を作った、と私は考えるのである。

このような系譜を大きくたどって考えてみると、現代日本語の書き言葉の文とは、外来の素姓の側にあるのであって、他方、土着的な話し言葉の文と対立している。エクリチュール（書き言葉）とパロール（話し言葉）との対立である。書き言葉の文は、まず漢字表現が多い。文章の分野にもよるが、カタカナの言葉もよく使われる。私の視点によれば、いわゆるカタカナの外来語は、伝統的な漢字表現と同一の機能を果たしている。書き言葉は、文法的には、主語が多く使われ、名詞中心の構文が多くなる。

書き言葉の文の素姓は、もちろん広い意味での翻訳文であり、直訳調文体がその原型であるが、重要なことは、書き言葉が、話し言葉に対して、構造として対立している、ということだ。たとえば小学校で、次の言葉を使って短文を作りなさい、というとき、主語を書かなければバツ点である。そして文末は終止形ではつきりと終え、句点をうたなければいけない。

こうして、書き言葉の文は、文法上の「文」を基本として成立していなければならない、という意識がつけられていく。他方、私たちの話し言葉の文は、「文」を基本としてはいない、と私は考える。

書き言葉と話し言葉との対立は、こうして、書き言葉の側から、話し言葉を警戒し、拒否し、それと対立しつつ形作られていく、と見ることもできる。書き言葉は、日本語では、話し言葉を単にうつすものではない。この点、西欧語におけるパロールとエクリチュールの関係と明白に違っている。

話し言葉は、土着の深い根に支えられて脈々と生き続けてきたわけだが、他方で、書き言葉の側からの警戒、拒否をその裏側で受けとめている。

話し言葉は、改まった言葉使いではない。まともに出せる言葉ではない、として、絶えず自らを規定させられている。表に出し、外に出した
ら、そのままでは「分らないはず」の言葉使いなのである。それは、気心の知れた者どうしの間でのみ許される裏方の言葉使いであり、だからこそ
また、ホンネを吐くことのできる言葉なのである。

(柳父章『日本語をどう書くか』による)

一 傍線部(2)(3)(6)(7)のカタカナを漢字にする場合、それに使用する漢字を含むものを、次の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は

(2) セツタイ

- 1 セツジヨクを果たして優勝した。
- 2 セツソクな判断を戒める。
- 3 セツナ的な考えを批判する。
- 4 王国のタイカン式に出席した。
- 5 自宅でタイキしていた。

(3) セイズイ

- 1 海外にエンセイする。
- 2 玄米をセイハクする。
- 3 眠りからカクセイする。
- 4 まるでからすのギョウズイだ。
- 5 他のツイズイを許さない。

(6) タイナイ

- 1 新しい時代のタイドウが見られた。
- 2 急な出来事にもタイゼンとしていた。
- 3 タイカ一掃で売り上げが伸びた。
- 4 任期半ばでユウタイした。
- 5 武士ではないがタイトウを許された。

(7) キツスイ

- 1 釣りの醍醐味をマンキツする。
- 2 主張の根拠をキツモンされた。
- 3 野暮でブスイな人間だ。
- 4 野菜を入れてゾウスイを作る。
- 5 役場のスイトウ係になる。

二 傍線部(1)「文化の二重構造」とあるが、その説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は

5

- 1 外国人に「分るはずがない」日本固有の文化と、誰にでも「分るはず」の外来の文化
- 2 ホンネで守ってきた日本固有の文化と、タテマエとして取り入れた外来の文化
- 3 特殊性をもった日本固有の土着的な文化と、先進性をもった異国由来の文化
- 4 外国人が学ぼうとする日本文化と、外国人に「分らないはず」の日本固有の文化
- 5 新しい文化を生み出す日本固有の文化と、外から取り入れたにすぎない異国の文化

三 傍線部(4)「分るはず」の要素」とは何か。その説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は

6

- 1 日本の文化にも外国の文化にも共通してみられる二重構造
- 2 外国人が理解していると思込んでいる日本独自の文化
- 3 直接外国人とつき合う中で身に付けた外国由来の風習
- 4 日本固有の文化と外来の文化を融合させた国際的な言語
- 5 外国と日本とのあいだで一般化可能な文化の領域

四 傍線部(5)「言葉の構造こそ下部構造であって、思考様式、文化のパターンの方はむしろその上部構造である」とあるが、筆者のどのような考

えを述べたものか。その説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は

7

- 1 言語の構造を理解するには、表に出やすい思考様式や文化のパターンを分析する必要があるということ
- 2 思考様式や文化のパターンは言語の構造と比較して、それぞれがより複雑な機構をもつということ
- 3 言語の構造と思考様式や文化のパターンはそれぞれ二重構造をもち、独立して存在しているということ
- 4 言語の構造の二重性は些末な問題で、思考様式や文化のパターンに本質的問題が潜んでいるということ
- 5 思考様式や文化のパターンの二重性が、言語の構造の二重性によって規定されているということ

五 傍線部(8)「書き言葉が、話し言葉に対して、構造として対立している」とあるが、ここでの「書き言葉」と「話し言葉」の説明として最も適

当なものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は

8

- 1 書き言葉では翻訳語としての漢語表現を多く用いるが、話し言葉では西欧語を多く用いる。
- 2 書き言葉は西欧語の文法を取り入れているが、話し言葉には本居宣長によって説かれた近代以前の文法が生きている。
- 3 書き言葉は西欧語のエクリチュールとパロールの関係を背負っているが、話し言葉は西欧語のパロールのみに接続している。
- 4 書き言葉には主語と述語を記すなどの規範があるが、話し言葉はそうした文法上の制約に縛られない。
- 5 書き言葉は外来語の普遍性の上に成り立っているが、話し言葉は外来語をそれぞれの固有性も含めて受容している。

六 傍線部(9)「分らないはず」の言葉使い」とあるが、その説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解

答番号は

9

- 1 同質の者だけでわかり合うことを前提とした、内向きで他人行儀な表現
- 2 ローカルな世界で培われた、わかりやすさを意識しない独創的で特殊な表現
- 3 土着の文化の中で育まれた、気の置けない間柄で用いられる堅苦しくない表現
- 4 日本のみならず外国由来の文化も吸収した、多義的で理解しにくい表現
- 5 土着の文化の中で養われた感性を基にした、難解で繊細な表現

七 問題文の文章の特徴について述べた次の1～5の中から、最も適当なものを一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は

10

1 日本文化の基本構造について論じていく中で、外国人とのつき合い方の二つの態度、オモテとウラ、タテマエとホンネなど、多くの人々が経験している身近な事柄について、二重の構造の対立が見られる具体例を次々に挙げていく。このように、対立の例の提示を中心とした論が展開されている。

2 話し言葉と書き言葉の二重の構造ということをはじめに述べるものの、すぐにはそれについて論ぜず、まずは日本文化の二重構造について、次に日本語における外来の素姓の言葉と土着の言葉との二重性について論じる。その後、書き言葉と話し言葉それぞれの特徴を示しながら、この二つの対立を主張している。

3 各段落はどれもあまり長くなく、短くまとまっているうえに、「と思う」「と私は考える」などの表現で終える段落が多い。このような表現を多く用いることによって、文章のほとんどの部分において独自の主張がなされていることや、著者の主張が多岐にわたることなどが、はっきりわかるようになっていく。

4 最初から第六段落までのまとめを「以上、ごく簡単に」で始まる段落で記し、次の第八段落以降の内容のまとめを「以上のように、日本の文化は」で始まる段落で記す。さらに、問題文前半部分の内容をまとめた「以上ごく大ざっぱに概観」で始まる段落もあり、主張を要約する段落が効果的に配置されている。

5 前半の段落では冒頭に接続詞を用いて段落どうしのつながりを示すことが多いのに対し、後半の段落では接続詞をほとんど用いず各段落が独立している。これによって、著者の主張を論理的に述べる前半部と、客観的な事実を繰り返し多層的に記述する後半部との、対照的な述べ方が際立つようになっていく。

八 次のア～カについて、問題文の内容に合致するものには1を、そうでないものには2を、それぞれマークしなさい。解答番号は 11

16

ア 浪花節や俳句などの伝統芸能は、日本固有の文化だが、外国人でも十分理解することができる。 11

イ 日本人は島国に住んでおり、たいていの人は直接外国人とのつき合いがない。 12

ウ 日本人の文化理解の態度は、自らの文化の特殊性を強く信じ、他国から日本に取り入れられている文化は普遍的であると考えるところから生まれている。 13

エ 時枝の国語文法論では、概念過程を経て成立した「詞」が、概念過程を経ない「辞」をまとめ、統一する構造を指摘する。 14

オ 日本人は元来異国の文字である「漢字」と自国の文字である「かな」を融合させることで、日本語の翻訳機能を強化した。 15

カ 近代日本語の文章表現は、漢文訓読の文体によって形作られた翻訳文体を基本としていた。 16

第二問 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

問題文は、戸谷洋志著『スマートな悪 技術と暴力について』の一節である。同書において筆者は、現代における「スマート」の本質を論じ、ある章では満員電車をテーマに寺田寅彦のエッセイを紹介する。寺田は一九二〇年のエッセイで、満員電車に乗る人々はその空間を不愉快に感じており、その不愉快さは強い伝染性を持つと記す。以前の寺田はそれを当然のことに思っていたが、海外渡航の体験を経て、車内に暴力が発生する日本の満員電車の異常性に気づいたのである。寺田はまた別のエッセイで、数本の電車を見送ることで満員状態を避けられることを科学的に説明し、満員電車に乗る人間は、むしろ好んで乗ろうとしているのだと結論づけている。このように寺田のエッセイを紹介した筆者は、以下のように続ける。

満員電車をめぐる寺田⁽¹⁾の分析の要点は次のように整理できる。第一に、満員電車において乗客は他者に暴力を加えている。第二に、乗客はその暴力に自ら望んで加担している。第三に、そうすることによって、乗客はその暴力を再生産している。第四に、乗客はそれを仕方のないことであり、何でもないと思っている。そして第五に、乗客自身にとっても満員電車に乗らないほうがむしろ効率的なのであり、乗客が満員電車に乗るのは、乗客の「趣味」である。

満員電車をめぐるこうした寺田の分析は今日においても説得力をもっている。しかし彼がそれを発表したのは一〇〇年前である。そしてそれが意味しているのは、日本社会における満員電車をめぐる状況が一〇〇年前から根本的に進歩していない、ということに他ならない。

ただし、この第五の点には疑問の余地がある。たしかに、乗客自身にとっても、電車を数本遅らせたほうが満員電車を回避することができ、不快感を軽減することができよう。しかし、だからといって乗客が満員電車に乗りたくて乗っていないわけではないだろう。少なくとも乗客は、もしも乗らないで済むならば、満員電車に乗りたいたいとは思っていないだろう。それでも満員電車に自ら乗らざるをえないのは、電車内で不快感を抱くことや、あるいは他者に暴力を振るうことよりも、優先するべき何かがあるからである。では、それは何なのだろうか。

社会学者の磯村英一によれば、それは、⁽²⁾満員電車を不可欠とする都市のシステムである。磯村によれば、都市とは「できるだけ多数の人間が、同

じ時間に、一定の場所に集まることによって、高度の集積の効果、都市エネルギーを生む」ものであり、満員電車はその副産物に他ならない。この意味において、満員電車は、システムの機能障害によって引き起こされているというよりも、むしろ、都市のシステムによって要求される一つの機能なのである。磯村は次のように言う。

逆説的にいえば、都市に住む者の大多数は強制的に、定められた時刻、定められた職場に、定められた学校に集合することが要求される。もしそれができないとか、阻害されるような場合には、人間は都市生活のなかで不適格だというらしく印を捺されることになる。

これは極めて逆説的な事態である。なぜなら、前述の通り、満員電車に乗ることはむしろ人間を非人間的にするからだ。

X

だからこそ、寺田が述べていたように、満員電車の不快感を回避するために電車を見送るということが、人間にはできない。それをしてしまったら、社会不適格者になってしまうからである。そしてそれは、電車が人身事故などによってストップしたときの、⁽³⁾乗客たちの異常な憤怒を呼び起こすことにもなる。磯村は次のように述べる。

その流れの強さは、幾万ボルトの電流のエネルギーにも相当する。たまたま交通機関が事故などでストップすると、この集積のエネルギーがいかにか強大なものであるかがわかる。交通事故による阻害ほど都市の人間を爆発に導くものはない。行動の全てが時間によって制約されている。それが共通して阻まれると、何倍もの反発となって現われる。それは仕事に強い情熱をもっているためとも理解できるし、勤務成績にかかわるからともいえるであろう。事故を乗り越えて定められた時間に何とかして間に合うような努力をする。その姿を想像すると人間の哀れさをさえ感じさせる。

定刻に集まることのできないものは、遅刻者として取り扱われる。それは遅刻者自身にとってマイナスであるばかりでなく、定時の集合を原則とするメカニズムそのものにとっても損である。だから都市が、交通の混雑にともなって、その打開策として、時差出勤などを奨励するが、これなどはまさに都市そのものの自殺的行為といわねばならない。例えば、どんなに巨大な組織があったとしても、その組織だけで、都市の機能が果たせるものではない。時差出勤のために、ある銀行は十時に始業したとする。他の銀行は九時に始業したとするならば、その一時

間が銀行の業務にとって、どれだけの損害をうけるだろうか。

ここから、なぜ人間は自ら望んで満員電車に乗りとうとするのかが明らかになる。すなわち、もしも満員電車に乗り損ね、通勤時刻を逸してしまつたら、それによって都市の「メカニズム」そのものに損失を与えることになるからである。満員電車の乗客は、自分のためだけに満員電車に乗るのではない。そうではなく、その満員電車によって成り立っている社会のシステムのためにそうするのである。

ここに都市の通勤システムがもつ二重の暴力性が示されている。第一にそれは満員電車の車内において人間同士の間の物理的な暴力を誘発する。第二にそれは、そうした暴力に耐えられないものを、社会不適格者として排除する暴力を発揮する。第一の暴力がそれとして認識できないことは述べたが、第二の暴力もまた不可視である。当然のことながら、この世界には満員電車の暴力に耐えられない人々がいる。身体が弱い人、道具を使わなければ立てない人、かつて満員電車のなかで傷つけられた人、そうした人々は大きなハンディキャップを負う。そして、実際には高い知識や能力があつたとしても、移動の機会を奪われ、自己実現の選択肢を狭められているのである。

これまで、満員電車の暴力性がどのように発露するのかを分析してきた。この暴力性は、本書がスマートな悪と呼ぶものによって、よりよく理解されるようになる。

スマートな悪とは、無駄を排除するロジスティクス⁽⁵⁾へと人間が自らを最適化し、その結果としてロジスティクスがもたらす悪に対して人間が無抵抗になる、という形で発露する悪である。満員電車は、効率的に配置された都市のシステムによって要求される機能であり、そのなかでは暴力が蔓延する。乗客は他の乗客を容赦なく押し潰す。それに対して良心が痛むことはない。それは、良心そのものがシステムへと最適化しており、それを悪いこととして認識できなくなっているからだ。他者を圧迫することがあつたとしても、そうすることは仕方のないことであり、当たり前のことである、と乗客は考える。そして、そのように他者を圧迫することになると知りながら満員電車に乗ること自体も、仕方のないことであり、当たり前のことである、と考える。そのようにシステムに最適化しているがゆえに、車内で押し潰されることに対しては文句を言わない乗客も、そのシステムの機能を麻痺させるような事態、たとえば人身事故に対しては憤怒を爆発させる。たとえばその事故によって誰かが亡くなつても、「迷惑だ」などと心無いことを思ったり、言えたりしてしまう。このような特徴は、そのどれもが、スマートな悪と Y するものである。

このような意味において、人間は、満員電車に乗るときにシステムの歯車になる。人間は自らをシステムへと最適化させ、スマート化させるので

ある。もちろん、このような主張に対しては次のような反論が生じるだろう。すなわち、そもそも満員電車はスマートなソリューションによって決されるべき社会課題である、ということだ。たとえばイギリスではビッグデータとAIを活用して、乗客の移動状況をリアルタイムで把握し、人員や車輛りょうの分配を最適化することで、満員電車の発生を抑制するシステムが開発されている。それによって満員電車が解消され、不快な思いを強いられる人が減るのなら、もちろんそれは望ましいことである。

しかし本書が述べようとしているのはそうしたことではなく、むしろスマートな悪が今日においても息づいており、現在進行形で、私たちを脅かしているということに他ならない。本書はアイヒマン注による戦争犯罪と日本社会における満員電車を例に挙げた。しかし、当然のことながら、この二つだけがスマートな悪が発露している事例ではない。それは他にも、まったく違った場面で、恐ろしい暴力として作動しているかも知れない。そしてその暴力性は、スマートな悪という概念の性質上、私たちにとって自明のものとして化し、そもそも認識することが困難になっているかも知れないのだ。

こうした暴力性に対して無自覚であり、絶え間のない自己批判を怠るのなら、超スマート社会という理想像はむしろ悪を最大化する世界として立ち現れるかも知れないのである。

注 アイヒマン＝ドイツのナチス親衛隊中佐。第二次世界大戦中のユダヤ人大量虐殺の責任者。

一 傍線部(1)「寺田」は、「天災は忘れた頃にやってくる」という警句を使ったとされる科学者の寺田寅彦であり、「吾輩は猫である」の登場人物のモデルになった夏目漱石の教え子でもある。これに関連して、次の(A)(B)の問いに答えなさい。

(A)「天災は忘れた頃にやってくる」と同じ「忘れること」についてのことわざに含まれる最初のことばを、次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は **17**

- 1 窮鼠きゆうそ 2 二階 3 喉元 4 暖簾のれん 5 仏の顔

(B) 夏目漱石に関係する人物の説明として、間違っているものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は **18**

- 1 漱石の説く個人主義の影響を受けた樋口一葉は、「みだれ髪」などの作品で女性の窮境を訴えた。
- 2 近代文学の出発点となる小説「浮雲」を著した二葉亭四迷は、後に漱石と同じく『朝日新聞』に勤めた。
- 3 文豪として漱石と併称される森鷗外は、「舞姫」の浪漫的な作風からやがて歴史小説や史伝に向かった。
- 4 新人時代の作品「鼻」を漱石に絶賛された芥川龍之介は、近代人の心理を鋭く分析する作品を残した。
- 5 漱石と親交のあった正岡子規は、病に伏しながら「歌よみに与ふる書」などで短歌革新の論陣を張った。

二 傍線部(2)「満員電車を不可欠とする都市のシステム」とあるが、その説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。 **19**

- 1 満員電車がなければ、人々は仕事を正確にこなすことができず、ゆたかな生活をおくることができない。
- 2 満員電車は、多数の人間が同様の行動を取ることで成立する都市生活が必然的に生み出したものである。
- 3 満員電車が生む暴力性は、都市の人間を互いに結びつけ、生きるための活力にさえなっている。
- 4 満員電車は、多数の人間が競い合い傷つけ合いながら共存する都市のありようを象徴するものである。
- 5 満員電車は、速さや正確さを競い合う都市のシステムにおいて有効な道具であり、うまく利用すべきものである。

三 空欄

X

には、ある一文が入る。その内容として最も適当なものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は

20

- 1 人間が非人間的になる境界は明確であり、その境界を越えてしまった場合に人間は社会不適格者になる。
- 2 都市のシステムの要求するものがそこで暮らす人々にとって苦痛なものとなっても、人々にはどうすることもできない。
- 3 社会生活を円滑にするために生み出された満員電車という手段が、利用する人間を非人間的にしているのである。
- 4 非人間的であることを受け入れる人間が社会適格者として承認され、それを拒絶する人間は社会不適格者として扱われる。
- 5 人間的なシステムが人々の幸せな暮らしを実現するのではなく、非人間的なシステムによって住民の豊かさが生み出されている。

四 傍線部(3)「乗客たちの異常な憤怒を呼び起こすことにもなる」とあるが、この表現の説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、その

番号をマークしなさい。解答番号は

21

- 1 満員電車の役割は、集積のエネルギーを生み出すことにある。にもかかわらず事故によってそれが果たされないという、都市のシステムにとっての異常さを乗客の気持ちと合わせて表現している。
- 2 ラッシュアワーでの事故によって通勤が阻まれたときの乗客の怒りは、満員電車での暴力に相当する非人間的な行為である。その怒りの大きさを極度に強い表現で表している。
- 3 事故によって通勤が阻まれたとき、人々は遅刻をしないように努力する。その乗客の悲哀を、それと対照的な「異常な憤怒」という過剰表現によって際立たせようとしている。
- 4 「異常な憤怒」とは通勤通学時に事故に遭遇し、予定通りに行動できない人々の気持ちを表現したものである。過剰な表現によって迷惑している人々が多数いることを読者に伝えている。
- 5 「異常な憤怒」は、乗客たちが個人的な良心さえも都市のシステムに最適化させていることに起因している。このような事態の異常さを、筆者は強い表現を用いることで読者に伝えようとしている。

五 傍線部(4)「二重の暴力性」とあるが、その説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は

22

- 1 人間と人間の間の物理的な暴力と、社会不適格者を排除する暴力とが背反的に存在している。
- 2 満員電車で蔓延する直接的な暴力と、無意識に弱者を排除する暴力とが重層的に存在している。
- 3 他の乗客を押し潰す暴力と、暴力性を知りつつ満員電車に乗る暴力とが相即的に存在している。
- 4 良心が痛む物理的な暴力と、システムの中で良心が消え去る暴力とが並行的に存在している。
- 5 社会に対し人間を最適化する暴力と、その結果人間を無抵抗にする暴力とが両義的に存在している。

六 傍線部(5)「ロジステイクス」の意味として、最も適当なものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は

23

- 1 出所の異なる多様な情報を、そのままの形で集積し目録化した体系
- 2 資材人員の調達から生産、移送、提供等に至る、物の流れ全体の管理
- 3 作品を完成させた後、あえて発表までに時間を空けて熟成させる期間
- 4 危機的または混乱した状況にあつて人間性を失わないための倫理規範
- 5 公平性を保つために企業活動等に要求される法令および社会規範の遵守

七 空欄 Y に当てはまることばとして最も適当なものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は

24

- 1 協働
- 2 対立
- 3 調和
- 4 符合
- 5 矛盾

八 傍線部(6)「次のような反論が生じるだろう」とあるが、主張に対して想定される「反論」を記すことの筆者の意図はどのようなものか。その説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は 25

- 1 社会課題の解決手段をスマート化によって得ることと、人間が社会に合わせて自らを最適化することの弊害とを明確に区別する。
- 2 スマート化によって導かれる方法自体は望ましいが、そこから生じるスマートな悪の弊害は見逃ごすことはできないと主張する。
- 3 反論としてイギリスの事例を示し、同一のテクノロジーでもそこから生まれる弊害は文化によって異なるという主張を確認する。
- 4 反論として記したスマート化の利点が有効でないことを示し、人間の社会への最適化というスマートな悪の異常さを際立たせる。
- 5 スマート化によって課題が解決する理想を反論でも示すことで、スマートな悪を無くすという主張と共通していることを伝える。

九 傍線部(7)「超スマート社会という理想像はむしろ悪を最大化する世界として立ち現れる」とあるが、その説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は 26

- 1 スマート社会は効率が優先され、非効率なものは排除される社会である。そのため人々は新しい技術を無批判に受け入れ、そこから発生する問題点に目を向けなくなるということ。
- 2 スマート社会はさまざまな暴力性を認識不可能とすることで成立している。そのため人々はその暴力に意図的に加わり、暴力が支配する社会となるということ。
- 3 スマート社会は効率的なシステムを当たり前に受け入れることを強いる。そのため人々はそのような社会に気づかなくなり、悪が蔓延するということ。
- 4 スマート社会は理想にすぎず、現実には存在しない。それなのに人々はそのような社会を追い求めて努力し続け、その徒労感の中で多くの人が絶望するということ。
- 5 スマート社会はシステムに人間が最適化することを求める社会である。そのため人々は非人間的な暴力にも進んで加担し、いずれは社会システム自体を破壊してしまうということ。

一〇 問題文中の「暴力」をめぐる三人の発言のまとめとして、最も適当なものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は

27

- 1 寺田は、満員電車を例として人間が効率化の流れの中に生きていけると言い、磯村は、効率化を妨げる者への怒りが事故の際に明らかになると言い、戸谷は、社会不適格者を効率的に排除するスマートな社会こそ巨大な暴力だと言う。
- 2 寺田は、満員電車の暴力性が強い伝染力を持つと言い、磯村は、社会化した暴力は被害者を排除して見えなくすると言い、戸谷は、社会不適格者が排除された社会で生きる人間はシステムの歯車になると言う。
- 3 寺田は、乗客が満員電車を避けられるのに好んで乗ると言い、磯村は、都市の暴力性には物理的な面と社会的な面があると言い、戸谷は、効率的に配置された都市の中では暴力が無効化して善も悪もなくなると言う。
- 4 寺田は、満員電車をいくつか見送ることで暴力的な状態が避けられると言い、磯村は、都市の暴力に耐えられない人々に目を向けるべきことを言い、戸谷は、暴力性を意識することでスマート社会という理想が成立すると言う。
- 5 寺田は、満員電車の乗客が自ら望んで暴力的になっていると言いつ、磯村は、都市のシステムが満員電車に耐えられない人間を排除すると言いつ、戸谷は、スマートな社会では良心もシステムに適応して悪を認識できなくなると言う。

第三問 次の文章は幸田露伴が書いた小説であり、主人公のト川玄一郎が東京を出て東海道を旅するさまを描いたものである。これを読んで、後の問いに答えなさい。

旅衣、今日思ひ立つてにはあらず、三年も四年も前より、我が性分のをかしく拗ねたるに我から鑑定を付けて、いつまで都に居たればとて、我が如き当世に背ける男の、とても立身出世して、人並に一軒の主人顔するやうなることは、朝顔の蔓に蕃瓜の生る法はあれ、間違つても出来る道理無し、所詮は華美嫌ひの淋しい事好き、気位のみ高くて薄間抜の身の、車の轟き人の登音忙しき都に居てまごつくだけが、塵埃の被ぎ損、夫よりは灘渡る蝶の羽の危くとも、空吹く風に任せて飛び、潮に漂ふ浮木に宿つて憩ふやうに、千里の山河に嘯きあるきて、身は雲烟の定め無く、心は風雅の寂しみに遊び、いよいよ進退究まらん其の夕には、それまでの運なり生命なりとあきらむべしと、幾度か幾度か思ひ思ひしが、流石に棄てんとすれば手馴れしものは古扇も惜まるる道理、何処やらに猶後髪(1)の牽かるる未練ありて、一日一日と過し来りしが、既に親より譲られし小さき地処住家だけを孝行気の有るまま、破羽織を世話焼婆にでも押付くる様に人に預けし外は、何も彼も売つて仕舞つて、肩の枒(2)を下せし積りの、身は軽々と、主なし親なし役目無しの、頭の上には茶色帽子一つ、小鞆、洋傘これで旅人、脚絆草鞋(3)までも及ばぬ開けたる世のあり難さ、おもしろや山水に咽を潤して渴を医し、松が根枕、夢にさざんざの声を聞くも是よりと年久しく住まひたる麻布の町を立つて、年齢は疎に鬚髭もやや硬うなる三十ばかりの男、日ごろ偏屈の友無し妻無し、思ふ人無し、ト川玄一郎たつた一人、陰法師も見えざりし曇り天の雲淋しき朝、路行く花屋の籠の芒そよぎて秋立つ風に、袂を振つて飄然と遂に出でぬ。馴染みし都に左様ならとも云はず、八百八町への挨拶には撒水冷ゆる停車場での噴嚏一つ。

(4) 走り飛ぶ汽車の中には何程やきもきと物を思へばとて、手も脚も箱から外へは届くこと無ければ、夢に出す力瘤、何の益にも立たぬむだ思といふもの、せめてはベンチに腰掛くる間だけでも、見る間に変わり行く窓外の景色、結構な絵巻物に眼を迂らせて行くやうなる此の面白さを味はふべきにと、喧ましき世間話を煩さがりてト川の耳を塞ぐに、猶募る乗合の雑談、株の上り下りを甲高声が論ずれば、米作の善悪を胴摩声が語る、それにも交る婆様のくどくど、海老茶のべちやべちや、あちらで赤子泣き、こちらでは新聞を誦む、人さまざまの三等列車中にも仔細らしきが田の面を見めぐらして、今年は雨多かりし湿気年の事ゆゑ、枇は屹度沢山に出来て、家鴨の豊年には違無けれど、彼の通り稲の頭も垂れて下向いて居れば、半作以上は受合ひまする、あれが蒲穂のやうにピンと上向いて立つて居るやうでは、それこそ大変でございますがといふ。其尾に従ひて軽薄らしい声が、へへエ、左様いふ者でございますか、それでは先づ有りがたい、して見れば何も同じこと、人間も悪くツンとして頭の高い奴に碌なもの

は無いものでございますと、人々の中に挟まりて坐りながら、誰にも彼にも相手にならず、窓の外ばかり見て居る玄一郎に中てて云へば、皆々一時に左様左様と笑ひぬ。成程僅に三十里四十里の間を乗り合せたる汽車の中でさへ、世に馴れ親まぬ、我が胸の底の香のおのづから洩れて、心に何の毒は無けれども愛想気無き素振り人は人の憎みを斯くまでも惹くか、今さら初めて知つた訳では無けれど、如何にもこれでは何をして世に用ひらるることなどの出来さうにも無い筈、嗚呼我ながら能くぞ何も彼も思ひ切つて、仕たい三昧と賢くも定めけるよ、世に色気無ければ何と云はれても氣は安し、雲は来り雲は去りて調戲へど彼の山は動かず、先刻も青々、今も青々、人は笑ひ人は譏つても自分は自分、高が一つ車に乗り合はせし間の事、下りて仕舞へばそれまでと済まして、何処までも拗虫の猶の事人と言はず、やがて箱根の山過ぎて沼津、折から変り易き初秋の空、天半に早風起つて吹き払ひたる雲の隙間に、思ひ設けぬ富士が根の高々と現はるれば、これは大なる拾ひものと其の美しさに嬉し堪らず、此の麓路二日三日歩かんと忽ちにして汽車を下りぬ。

(7) 山は白雲の上に見てこそめでたけれ、和歌の浦の眺めが善きとて水底に潜つて見るものは無けれど、富士は役の小角以来疲勞れるが好物の大痴漢年々に絶えず、あたら名山を泥草鞋の下にして、おのが分別の低さには氣がつかいで、来て見れば左程でも無しなど譚語を云へるも可笑と、すべて人とは心の行き方の違ふト川は、ただ麓路の東海道を三日ばかり歩きけるが、それも、飽きて別るるよりはと、猶八葉蓮華の姿の残り惜と思ふ時、また汽車に乗りて、何といふ的あるにはあらねど先づ心ざしたる西の方に走り、幾日馴染みし駿河の山の出来し其の夜に成りしといふ琵琶の湖辺、石山の秋の色見たくて大津に下りぬ。

昨日は五十四帖にやさしき女が心の色を染めし石山の其の月夜を見て、今朝は洒落たる翁が五七五文字に魂魄の寂を籠めたりし国分山の、其の秋のあかつき、とくどくの清水に自炊のわびしさを思ひやりなどして、大津も一夜泊れば琵琶の湖の水光四明が嶽の山色も身に染みて足れり、いでこれよりは汽車を飯るまでも無し、逢坂の関路の跡履みて京都へと出でんとしけるが、夜半の涼風に我知らぬ寝冷の腹渋りて、独り何やら丸など服す間に昼は過ぎぬ。聽て心地は全く常に復りしも猶山路を京へ行かん力無く、錢を吝みてにはあらねど長途の旅をせんつもり奢を厭ひて、ただ雨露を凌がんにばかりに宿りしいぶせき旅宿に嬉しからねど今宵もまた仮枕の夢を結ぶに決めしト川、ただ夕暮まで午睡に費さんも智恵無しと、当も無きぞろあるきに町を西北へと通り過ぎて、大津も出外れんとする近く、家並もやうやくに悪く、店つきさびれて、唯さへ悲しき秋の夕を樓檻被たる小児の徳利買の酒提げて帰る後姿、肋骨見えたる瘦狗の長々と路傍に寝て居るなど、いづくも同じ場末のあはれさを現せり。辛崎の松を見に行くでも無し、湖はまだ明るくとも既暮近し、これまでなりと帰らんとする時、ふと一軒の古道具屋の眼に留まりたり。金物の三四ヶ所剥脱れたる痕

見苦しき古筆筒、古鏡台、古火鉢、皿、鉢、井、籠などの着いたる可厭な贗ひ古銅の花生、鶴頸の瓢箪、古茄子が潰れたかと思ふ煙草入、ひすばり返つて板のやうに堅さうな革の古靴、絃の五六本切れて付いて居る間づまりの琴、中は何か知らず煤けた龕紙、鉛の様な色した馬鹿太い古煙草管、一として碌なもの無き田舎の骨董屋の、主人は瘦顔の頤骨尖つて、羽子板に目鼻付けたやうなるが、もはや店を鎖して仕舞ふ支度なるべし、腹の減つた眼の中勢力無く、そろそろと何や彼や片づけ居るなり。嫌ひといふにはあらねども、さして書画を好むといふにもあらぬ卜川なれど、丁度其店の真中に当りて、宙に吊り下げられたる横幅の茶屋掛ほどなるが、中は兎にかく表装は女物の長襦袢など用ひたりとおぼしく、紅やら縹色やら緑色やらの種々の色のちらちら見えて、疑ひも無き友禅染の、昔思はれて艶に媚かしきが、幾日店晒しにせられて道路の塵埃に古され果てし今日ぞや、夕暮淋しく闇逼る今渡る秋風の煽りに、ぶらありぶらありと吹き動かされて懶げに廻り居れるを見て、何と無く云ひ知らぬ哀れさをおぼえ、引き付けらるるが如く其の店に近きぬ。

(幸田露伴「土偶木偶」による)

- 注1 杵||物を担ぐときに使う棒、特にてんびん棒を指す。
- 注2 脚絆||旅に出るときなどに、防寒や保護を目的として脛に着けた布。
- 注3 八百八町||江戸市中に多くの町があること。ここでは、江戸から東京となった街そのものを指す。
- 注4 胴摩声||調子外れで、濁った太い声。
- 注5 枇||殻ばかりで、米となる中身の入っていない糶。
- 注6 蒲穂||キク科の多年草である蒲の穂。
- 注7 役の小角||修験道の開祖とされる、七世紀から八世紀にかけて活躍した呪術者。富士山に登って修行を重ね、天を飛べるようになったという伝説がある。
- 注8 龕紙||仏像などをおさめるためのもの。
- 注9 頤骨||下顎の先端のこと。

一 傍線部(1)「空吹く風に任せて飛び、潮に漂ふ浮木に宿つて憩ふやうに」の説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は **28**

- 1 旅に出る直前の緊張した気持ちを擬人的に書くことで、主人公ができるだけそれを自覚しないように努めている。
- 2 旅に出た直後に生じた不安な気持ちを比喩的に書くことで、他者に鮮明なイメージとして伝えようとしている。
- 3 都会を離れて旅に出たときの気ままなありようを対句的に書くことで、より印象深くなるように表現している。
- 4 自然の中を歩いているときに思わず口笛でも吹きたくなるような気持ちを抑えようとして、別のものに視点を当てている。
- 5 旅の途中で目にした自然を写実的に描写することで、目の前にある光景を読者に向かって正確に伝えようとしている。

二 傍線部(2)「開けたる世のあり難さ」とあるが、その内容として最も適当なものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は **29**

- 1 便利になった世の中の快適さ
- 2 開放的な世間の風潮の目新しさ
- 3 進歩的な社会の生きにくさ
- 4 自由な世の中の厳しさ
- 5 旅支度を容易にできることの珍しさ

三 傍線部(3)「飄然と」の意味として最も適当なものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は **30**

- 1 さわやかに勇ましく
- 2 ほんやりしていると
- 3 あれやこれや忙しく
- 4 運を天にまかせて
- 5 目的もなくふらりと

四 傍線部(4)「走り飛ぶ汽車の中」とあるが、ここでのト川の様子として本文と合致するものには1を、合致しないものには2を、それぞれマークしなさい。解答番号は 31 35

ア 四人掛けのボックスシートに座っていて移動したいと思っているが、混雑のため席を変えられずにイライラしている。 31

イ 窓の外を流れていく景色を見ることに集中するために周囲から聞こえてくる音を防ごうとして、耳をふさいでいる。 32

ウ 同じ車両の中にいる人々が非常に気になっており、人々の態度や容姿、発言などをじっくりと観察している。 33

エ 周囲に溶け込めないことで将来の立身出世を絶望しつつ、せめて周囲からとやかく言われないようにと決意している。 34

オ 電車に乗り合わせた人々とは、ここを出れば会うこともないだろうと考え、ひねくれたようにじつと黙ったままである。 35

五 傍線部(5)「仔細らしき」とあるが、これは本文においてどのような人を示しているか。最も適当なものを次の中から一つ選び、その番号を

マークしなさい。解答番号は 36

1 細かいことにこだわっている人

2 農業の研究をしている人

3 事情がよくわかっていそうな人

4 おせっかいに助言する人

5 今年の稲作を不安がっている人

六 傍線部(6)「忽ちにして汽車を下りぬ」とあるが、なぜ汽車を降りたのか。その説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、その番号を

マークしなさい。解答番号は 37

- 1 悪天候の中でも富士山の頂が見え、その美しさが天からの贈り物のように思えて、全体が見えるまで待ちたくなつたから
- 2 雲の隙間から思いがけず富士山の雄大な姿が見え、大きな幸運に出会えたような気がして麓を歩いてみたくなつたから
- 3 沼津あたりに来ると急に天気が回復して富士山が見え、もっと美しい景色を探して周辺の街を散策してみたくなつたから
- 4 沼津まで来て富士山の姿が見えたことで心境が変化し、我慢していた車内の喧噪けんそうにとうとう堪えられなくなつたから
- 5 富士山の麓は見えたものの頂上までは見ることができなかつたので、汽車を降りてでも見ておきたいと思つたから

七 傍線部(7)「山は白雲の上に」で始まる段落の前半で述べられている内容として最も適当なものを次の中から一つ選び、その番号をマークしな

さい。解答番号は 38

- 1 富士山は雲の上に頂上が見えている姿を地上から見上げるのが美しいのであって、役の小角のように空を飛んで上から見下ろしたのでは、その美しさがわからない。
- 2 海辺の景色が美しいからといって海に潜る者はいないのに、富士山についてはわざわざ山に登ってくたびれるというばかげたことをする者が、後を絶たない。
- 3 和歌の浦の景色は遠くから見渡したほうが美しいが、富士山はどのような角度から見ても美しいものなので、これらの二つは美しさの性質が大きく異なっている。
- 4 和歌の浦の絶景を見るためには海の底に潜る必要はないが、富士山の場合は実際に登ってみて肉体的な疲労を感じたときでなければ、本当の素晴らしさが理解できない。
- 5 富士山は登っているときの景色も美しいものではあるが、役の小角のように空を飛んで上から見下ろした場合には、また別の素晴らしさを感じ取ることができる。

八 傍線部(8)「嬉しからねど」とあるが、なぜ嬉しくもないのか。その説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は 39

- 1 寝冷えのための腹痛によって寝込まなければならず、なんとか痛みは治まったものの体調がまだ十分でなかったために、急ぎの旅に思いがけない足止めをくったから
- 2 長旅になるのを覚悟して無駄遣いをせずに節約してきたのに、体調を崩して旅を再開することができなくなったために、宿泊料の高い宿に連泊しなければならぬから
- 3 体調は回復したものの強い雨風がまだ続いているために、見るべき名所も何もない土地の宿で、することがなくただ昼寝ばかりして過ごしているから
- 4 体調が悪いためゆっくりと休みたいのになかなか寝付くことができず、仮眠のような浅い眠りしかできない状態で、宿から出立することになったから
- 5 腹痛は治まったがまだ十分に調子が戻らなかったために、ただ一夜の雨露をしのぐためだけに泊まったみすぼらしい宿に、思いがけず連泊することになったから

九 問題文の表現の特徴についての説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。解答番号は **40**

1 古文を擬した文章で書かれているが、読点で繋げていくだけでなく、句点によって文を多く区切っている。このことが独特なリズムを生み、流麗な文体となっている。

2 漢語や仏教語、西洋の言語の翻訳語を多用した格調高さと、会話部の口語とを混ぜた独特の文体は、作者である幸田露伴が提唱した言文一致の文章だと言える。

3 語り手は主人公であるト川とは別に設定されているが、語り手がときおりト川の視点から語ることによって、主観的な感興を交えながら周囲の情景を描くことが可能になっている。

4 比喻表現や歌語の使用といった表現技法を排除することで、ト川の周囲に見えている光景をあるがまま正確に描写し、言葉として再現することを試みている。

5 語り手がト川と一体となって驚きや感動を表現することで実況中継的な記述が可能になると同時に、それを読者にも喚起するように呼びかける語が見られる。

一〇 次のア～オについて、問題文の内容に合致するものには1を、そうでないものには2を、それぞれマークしなさい。解答番号は

45

41

ア 数年前から旅に出ることを考えていた卜川は、ある年の秋にほとんどの持ち物を処分し、曇り空の東京を後にして気ままな旅に出発した。

41

イ 旅に出るときに、親から譲られた土地住居だけは手放すことができず、ふだんから身の回りの世話をしてくれていた使用人の老女に預けることとした。

42

ウ 三十歳を過ぎて髭を生やしたみすぼらしい風貌をしている現在の卜川だが、もともとは麻布の立派な家に住んでおり、高級感のある身なりをしていた。

43

エ 旅の途中、卜川は自身と松尾芭蕉とを重ねて五七五の俳句を詠みながら大津に向かい、そこから『おくのほそ道』の終着点である大垣を目指すことになった。

44

オ 入ろうとした古道具屋では、ずっと売れ残っていた商品が塵や埃をかぶっていたが、それが夕暮れの秋風に吹かれる様子に卜川は惹き付けられていた。

45